

私は何だったのですか？

清水陽子

奈良県・36歳・公務員

本当は今でも好きかもしれません。別れて、ましてや私の父の葬式にすら来てくれなかったあなたのことをこんな風に思っているとしたら、私は親戚中から白い目で見られるでしょう。何より自分で自分の事を卑下してしまうでしょう。でも、あなたと過ごした数年間は、他人と過ごしたという私の一生の中ではもうあり得ない貴重な時なのです。

友達がみな恋愛結婚していく中で、年下のあなたと一緒にいたいけれど、皆の反対の中で実現できそうもなかったウェディングベルを鳴らした日、愛するあなたの子どもを授かり、その生命を共に育てていたあの頃が一番幸せでした。家族三人だけでもう少し暮らしたかった。なのに突然の同居の申し出。

長男のあなたとしては、両親や弟妹と新築の家に住みたかったんだよね。けれど、「あんたは他人」と言われた私の苦労も理解して欲しかった。年下だから無理でしたか。「幸せにするから」と言われ、新婚旅行先で老後のことまで笑いながら語った私達。結婚を反対され親の目を盗んで逢っていた頃、霧で真っ暗な山道を懸命にハンドル操作して下さったあなた。怖いのに横で妙に安心していた私。あの私達はどこに行ってしまったのでしょうか。あれは夢。

現実には、年上の私が生活を支える日々。過労で倒れた私へのあなたの家族の冷たい言葉。忘れられません。入院中、一度も子どもに会わせてくれず、「あの嫁と離婚せい！」という両親に従ったあなた。間に入った人の「三人でやり直せば？」の言葉にも応じず、「子どもだけは返して！」と泣き叫ぶ私を冷たい目でみていたあなた。何があなたをそこまで変えたのですか。

優しかったあなたを思い出すたび、人が信じられなくなった私です。

今度、子連れで再婚し同居も解消するとか。じゃあ私はいったいあなたにとって何だったのでしょうか。若き日の踏み台ですか。あの時は重かった五つの年の差。30歳を過ぎたら何とも感じなくなりました。ぜひ聞きたい事があります。

私は愛されたのですか。利用されたのですか。

※元夫が今度再婚します。子どもとともに過ごしている彼は、着実に年を重ねていますが、子どもを取り上げられた私は、もがき苦しむ毎日です。子どもを思う苦しい胸の内を書かせてもらえただけでありがたいです。